

方剂名	効能	生薬組成	
			書籍
<b>清熱剤 清気分熱剤 1</b>			
びやっことう 白虎湯	清熱生津	石膏 30g・知母 9g・炙甘草 3g・粳米 9g 水煎し米が熟したら滓を除き、分3で温服する。	
傷寒論	<p>&lt;主治&gt;</p> <p>肺胃熱盛 高熱、悪熱、顔面紅潮、呼吸促迫、呼吸が粗い、口渴があり冷たい飲み物を欲しがらる、汗が出る、舌質が紅、舌苔が黄で乾燥、脈が洪大あるいは滑数などを呈す。</p> <p>&lt;病機&gt;</p> <p>風寒が化熱して裏に入るか、風寒が裏に直入して化熱し、陽明（胃腸）で燥熱が熾盛になって散漫する「陽明熱証」、あるいは温邪が裏に伝入り、肺胃熱盛を呈する「気分熱証」であり、後世には「大熱、大汗、大渴、脈洪大」の四大症状を特徴とする病態として概括された。</p> <p>手太陰肺は一身の気を主って宣発し、胃は十二経の気血の源であり、肺は皮毛を主り、胃は肌肉を主るので、肺胃に無形の燥熱が散漫すると、全身の上下、内外、および筋肉、皮毛に満ち広がって高熱、悪熱を呈するほか、陽明経脈は面頬を循るので顔面が紅潮する。裏熱が津液を蒸迫するために汗が多く、津液が消耗するので口渴、舌苔の乾燥がみられ、熱盛であるから冷たい飲み物を欲する。熱邪が擾心すると焦燥が生じ、肺気を阻滞し上逆させると呼吸が促迫して粗くなる。熱邪の燻灼を受けるので、舌苔は黄になる。熱邪が気血を涌盛にするために、脈は洪大あるいは滑数を呈し、舌質が紅になる。</p> <p>&lt;方意&gt;</p> <p>肺胃熱盛で津液が消耗しつつあるため、辛寒清熱と甘寒生津の配合により清熱生津する。</p> <p>辛甘・大寒の石膏は、肺胃二経に入って清熱すると共に透熱出表し、気分の高熱を除く。苦寒で潤性の知母も肺胃に入って清熱滋陰に働き、石膏との配合で清熱止渴、除煩の効能を強める。甘平の炙甘草は益胃潤肺に、粳米は和胃護津に働き、清熱薬による傷胃を防止すると共に、石膏との配合で甘寒生津に働き、全体で清熱生津、除煩の効能が得られる。</p> <p>&lt;参考&gt;</p> <p>表閉で「汗無し」の場合には、白虎湯・白虎加人参湯を用いてはならず、禁忌である。</p> <p>燥熱が三陽に充斥して、少陽枢機を阻結した「三陽の合病」である。</p> <p>辛温発汗の誤治で助熱すると、邪熱が厥陰に内陥し心包を擾乱して譫語が生じる。誤下すると少陽枢機がより結滞すると共に、邪熱が厥陰に陥入り、邪熱上蒸による額の汗や、気機阻結による四肢の冷えが発生する。自汗がみられるのは、邪がより深く入って陽明裏熱が熾盛になり、少陽枢機が通利していることを示すので、白虎湯を使用するのである。</p> <p>厥陰（肝、心包）で邪熱が熾盛になり、気機が壅遏されて陽熱の外達ができなくなって、四肢の冷えがみられるのであり「熱厥」である。厥陰邪熱を清泄するために白虎湯を用いるのである。</p> <p>傷寒と比較し、温熱病では入裏化熱が迅速で、裏熱熾盛が甚だしい。</p>		
びやくこかにんじんとう 白虎加人参湯	清熱生津・益気	白虎湯 + 人参 9g 水煎し服用する。	
金匱要略・傷寒論 温病条弁	<p>裏熱熾盛で傷津が生じ「大煩渴」「大いに渴す」「舌上乾燥して煩し、水数升を飲まんと欲す」「口燥き渴す」「脈洪大」などを呈するとき、すなわち高熱、つよい熱感、はげしい口渴、多飲（冷たい飲み物を好む）、顔面紅潮、発汗、脈が洪大に、白虎湯に益気生津の人参を加えて気津を双補する。</p> <p>ただし、「時々悪風」「背微悪寒」「煩」「心煩」など、少陽枢機不利による陽熱布達の障害や心神上擾の症状を伴っており、少陽枢機不利があるために裏熱が外泄できない。</p> <p>「汗なし」のときは、表藪であるから、白虎湯と同じく本方（白虎加人参湯）は禁忌である。</p> <p>暈（日射病、熱射病）および熱病で、汗が出て口渴が強く気津両傷を呈するときに用いるとよい。</p> <p>日本での保険適応効能、効果 のどの渇きとほてりのあるもの</p>		
そうしびやっことう 葱豉白虎湯		白虎湯 + (葱白・豆豉・細辛)	
		白虎湯の加減方で、白虎湯に葱白・豆豉・細辛を加えたもので、白虎湯証に加えて、気分熱盛に風寒外束を伴うときに用いる、解表法との配用である。	
びやくこごうおうれんげどくとう 白虎合黄連解毒湯		白虎湯 + 黄連解毒湯	
		白虎湯の加減方で、白虎湯に黄連解毒湯を加えたもので、白虎湯証に加えて、温毒の発疹（皮下出血）、煩熱、うわごと・不眠を呈するものに用いる、清熱解毒法との配用である。	
さいこびやっことう 柴胡白虎湯		白虎湯 + 柴胡	
		白虎湯の加減方で、白虎湯に柴胡を加えたもので、白虎湯証に加えて、半表半裏証の往来寒熱があり熱多寒少を呈するものに用いる、和法との配用である。	
びやくこじょうきとう 白虎承気湯		白虎湯 + (大黄・芒硝)	
		白虎湯の加減方で、白虎湯に大黄・芒硝を加えたもので、白虎湯証に加えて、気分熱盛に意識障害、うわごと、便秘、腹痛、尿が濃いなどの熱結の症候を伴うときに用いる、清熱と瀉下の配用である。	
ちんぎやくびやっことう 鎮逆白虎湯		白虎湯 - (甘草・粳米) + (半夏・竹茹)	
		白虎湯の加減方で、白虎湯の甘草・粳米を除いて、半夏・竹茹を加えたもので、白虎湯証に加えて、気分熱盛に悪心、上腹部の痞えなど胃気上逆を伴うときに用いる、清熱と降逆の配用である。	
ぎんぎょうびやっことう 銀翹白虎湯		白虎湯 + (金銀花・連翹)	
		白虎湯の加減方で、白虎湯に金銀花・連翹を加えたもので、気分熱盛に用いる、清熱と透熱解毒の配用である。	
かはんとう 化斑湯		白虎湯 + (犀角・玄参)	

	温病条弁	白虎湯に犀角・玄参を加えたもので、白虎湯証に加えて、気血兩燔で皮下出血、高熱、口渴、意識障害、うわごとなどがみられるときに用いる。 気血兩清の効能をもつ。
しんかぎよくじょせん 新加玉女煎		白虎湯 - (甘草・粳米) + (生地黄・玄参・麦門冬)
		白虎湯から甘草・粳米を除き、生地黄・玄参・麦門冬を加えたもので、白虎湯証に加えて、気血兩燔で高熱、口渴、煩躁、斑疹、舌苔が黄、舌質が絳などを呈するときに用いる。 気血兩清の効能をもつ。
さいれいびやっこう 犀羚白虎湯		白虎湯 + (犀角・羚羊角・釣藤鈎・菊花)
		白虎湯に犀角・羚羊角・釣藤鈎・菊花を加えたもので、白虎湯証に加えて、温熱病による傷陰動風の鼻や眼の乾燥、顔色枯焦、意識障害、手足のひきつりなどに用いる。 気血兩清、熄風解痉の効能をもつ。
びやくこかけいしとう 白虎加桂枝湯	清熱解肌・通絡	白虎湯 + 桂枝木 9g 水煎し服用する。
金匱要略		温瘧の高熱、熱感、口渴、嘔気などの陽明裏熱の症候、あるいは熱痺の関節の腫脹疼痛、口渴、脈が弦数などの症候。 金匱要略に「温瘧は、その脈平の如く、身に寒なくただ熱し、骨節疼痛し、時に嘔す、白虎加桂枝湯これを主る。」とあり、「身に寒なくただ熱し」「嘔す」は陽明病変であり、「骨節疼痛」は太陽病変であり、「脈平」は少陽病変の弦ではなく、すなわち陽明裏熱が太陽表寒により鬱遏されて瘧を呈するものであるから、白虎湯で内熱を清し、辛散の力が弱い桂枝で解肌散寒する。熱痺に対しては白虎湯で清熱し、桂枝で通絡する。 清熱薬を増し、辛散の力が弱い桂枝木を用いているところに、温熱病に対する配慮がみられる。
びやくこかそうじゅつとう 白虎加蒼朮湯	清泄胃熱・兼祛脾湿	白虎湯 + 蒼朮 9g 水煎し服用する。
類証活人書		湿温病（湿が熱より重い）の発熱、口渴、汗が出る、身体が重だるい、胸苦しい、舌質が絳、舌苔が黄膩で乾燥、脈が洪大などの症候。 気分熱盛（胃熱）の高熱、口渴、汗が出る、舌質が紅、脈が洪大などが主体で、脾湿の身体が重だるい、胸苦しい、舌苔が黄膩などを伴う。 白虎湯で胃熱を清泄し、蒼朮で脾湿を除く。